

猪高の森自然観察だより 2025・1月号

開催日時：2025年1月26日（日）

天候：晴 気温：最低 2.4℃、最高 13.2℃（名古屋に於いて）

参加者：15名（内 NACS-J 会員 3名 小学生以下 4名）

テーマ：冬芽から調べる木や草と冬越しの鳥や虫

コース：森の集会所 → 畑 → 井堀の大楠 → 井堀下池

→ メダカ池 → 井堀の棚田 → ハンノキ湿地 → こもれば池 → シダレザクラの里 → 森の集会所

（画像は猪高緑地以外で写したものを含んでいます）

<https://sizen.ciao.jp/introduction/itakaleaflet20220112.pdf>（猪高緑地の地図参照）

（左上は混群を解消し始めたシジュウカラ）

夏に続いて記録づくめの冬が進行中です。1月の下旬に最高気温が3月並みの日が続く新記録を打ち立てました。極端な気候の変化は温暖化の為？それとも、長い歴史から見ればいままでが穏やかでありすぎたせいで、この姿が本来の姿？どちらにしても今を生きている我々にとっては、（他の生き物たちにとっても）暮らしづらい限りです。

○オオバンが・・・。



逆さづりになっていました。



右足に釣り糸のテグスが絡まっています。



一応、泳いでいましたが・・・。



片足では立てません。

それは、観察会の下見をしていた1月17日、森の集会所駐車場から畑に向かう切通の道で見つかりました。

冬鳥のオオバンが逆さづりになって暴れています。足に釣り糸のテグスが絡まって、その糸が木にさらに絡まっていました。

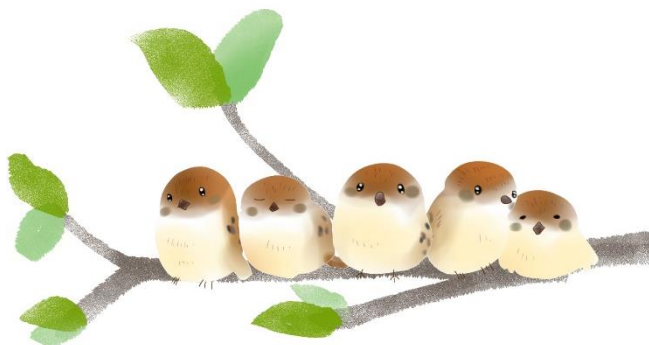
木を伐り糸を外すと、糸には大きな釣り針まで付いています。右足は伸ばしっぱなしの状態では正常ではありません。

池に放すと、一応泳いではいましたが、中洲に着いても、片足なので立つことも歩くこともできません。塚ノ杵池にはもう一羽のオオバンが居て、すぐ寄り添うようにしてきました。その後この2羽とも確認されていません。無事に飛んで行ったのでしょうか。

私たちの見えないところで、同様のできごとが起きているのでしょうか。塚ノ杵池は

釣り禁止になっています。放置された釣り糸の害はいろいろな場面で聞かれています。自分の趣味が周囲にどのような影響を与えているか、振り返って考えて欲しいものです。

○スズメが絶滅危惧種に・・・？



日本自然保護協会の会報「2025年1・2月号」の記事「いま里山で起きている危機」のなかで、里山という限定された地域という範囲ではありますが、身近な鳥の代表格であるスズメが年間3.6%の確率で減少しているとの報告がありました。

原因としては、①巣作りに適した場所の減少②生活の場である農地や草地の減少の

2つが挙げられています。このままでいくとスズメも絶滅危惧種になる可能性があるかと警告しています。

絶滅種、絶滅危惧種の категорияと判定基準については、以下のサイトから確認していただけると良いでしょう。

<https://www.env.go.jp/press/files/jp/113671.pdf>

○稲わらの束をひっくり返して見ると・・・そこは・・・。

畑に行く途中の散策路の横に稲わらの束がいくつか重ねて置いてある場所がありました。そこで、順番に除けてみると・・・。



クモの仲間



うじゃうじゃ ケバエの幼虫？



ダンゴムシ、ワラジムシの仲間？



スギナの若い芽

そこは生き物たちの冬越しの場所でした。

刈り取られた稲わらの発酵熱もあるのでしょうか。クモの仲間は成虫から幼虫まで、このようなところが元々好きなダンゴムシやワラジムシの仲間、よくわからない幼虫もたくさんいました。

プランターや植木鉢をお持ちの方は、そっとどかしてみてください。冬越しをしている生き物たちがいるはずですよ。

なるべく暖かい日で元の状態に戻すことを忘れずに！

○葉っぱの裏側をよくみれば・・・。



ヨコバイの仲間の幼虫



アシナガグモの仲間



ツヤアオカメムシ



ウスバフユシャク

虫たちの冬越しは、他にも

- ・ヤツデなどの大きい葉の裏側では
ヨコバイの仲間の幼虫、アシナガグモの仲間
- ・ヤマコウバシの冬でも落ちない葉で
ツヤアオカメムシ
- ・トイレの壁などの夜明るい場所で
フユシャクなど冬に羽化する蛾の仲間が夜の明かりに誘われて入りそのまま止まっています。

などそれぞれに見受けられました。この日は、成虫で冬越ししているテントウムシやテングチョウ、ルリタテハなどには出会えませんでした。

○フワフワまたまたふわふわ？！



左はガマの穂が種を飛ばしています。ひとつの穂の種の数には 35 万個と言われ、ほぐしていくと「ガマの穂の爆発」と形容されるように種が飛び出します。

おとぎ話の「因幡の白兔」が大国主命に教わって真水で洗ったあとでまぶしたのがこのガマの穂のふわふわです。

ウナギの蒲焼の「蒲」はガマ（蒲）の事で、平安時代はウナギを筒切りにして棒に差し焼いていたそうです。その姿がガマの穂に似ていたためにこの名になりました。開きになったのは江戸時代からとのこと。

子ども達に「ガマの穂の爆発」を体験してもらいました。



テイカカズラ



コバノカモメズル

左はテイカカズラ種、右はコバノカモメズルの種です。(メモリは1mm) 両方ともキョウチクトウ科の植物なのでよく似た仕組みの冠毛(ふわふわ)の付き方をしています。



チガヤ



オギ

左はチガヤの穂、右はオギ(ススキに似ています)の穂です。

よく見ると種と冠毛の付き方が前述のキョウチクトウ科の種と違ってのように見えます。



メリケンカルカヤ



セイトカアワダチソウ

左はメリケンカルカヤ、右はセイトカアワダチソウです。

セイトカアワダチソウの名前の由来になったのがこの姿、まるで泡をまとっているようです。

メリケンカルカヤはチガヤやオギに似ているようです。

フワフワの種は探すとたくさん見つかります。冬のふわふわ探してみませんか？



スケッチブックに絵を描いて、種と冠毛の付き方の違いを話しました。

○センダンの実の中身は？



冬の鳥たちの大事な食べ物の一つ、センダンの実



ちょっと臭う周りの果肉を取るとこんな種が入っています。



縦に見ると4稜から6稜までいろいろ！6~7割は5稜でした。



割ってみるとこんな感じ。稜の部分に種が入っていますが、全部ではないようです。



本当(?)の種は細長い紡錘形をしていました。

これを調べようと思いついたのは、今まで種と思っていたものが、実は果実と知ったからでした。

「核果」と呼ばれる種類で身近なものでは、梅や桃の種がそうです。梅や桃はその中に(多分)1個の種しか入っていないので、そのものを「種」と呼んで差し支えないと思いますが、センダンの場合2個以上入

っているので呼びにくいのではと考えます。

ちなみに解説をいくつか見ると「稜の数は5個」「7稜(これは見つけました)まである」など様々で「一つの解説に頼るのは危ない」と感じました。

○葉痕(葉の落ちた後)、冬芽を見るのはやっぱり楽しい！

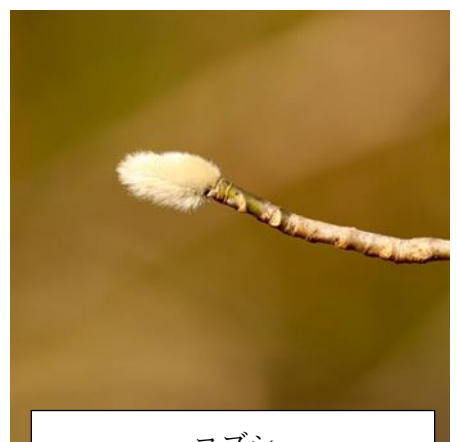
冬の観察のポイントのひとつは葉痕と冬芽です。見ていると楽しくなってきます。



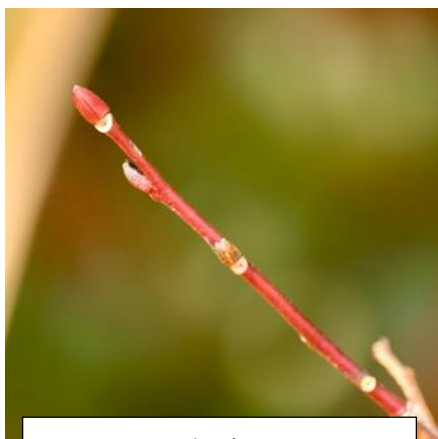
カラスザンショウ
とげとげに笑顔という感じがですね。



トチノキ
冬芽は粘液でべたついていません。



コブシ
ふかふかの毛に冬芽は包まれています。触る価値あり。



ネジキ
赤い帽子をかぶったこびと
のよう。



センダン
宇宙人(?)の顔?



ユズリハ
なんて言っているの、もう一
度言ってみて・・・。

葉痕は、付いていた葉に通っていた水分や養分を通す管の跡で「維管束痕」と呼ぶ部分が眼や口など人の表情に見えることがあるので、人気のある観察のポイントとなっています。

ここに挙げた葉痕以外にも楽しい種類がたくさんありますので、探してみてください。



田んぼで見た氷と霜柱
初めて見た子どももいまし
た。

次回観察会は2月23日(日)森の集会所集合 9:30~です。

名東自然倶楽部のHPでは毎月の猪高の森の自然観察会の紹介をしています。

<https://sizen.ciao.jp/>から是非ご覧になってください。

(右上の自然観察グループをクリックしてください。)

☆1月13日(祝) イベント:「カブトムシのお宿」開催!



1月恒例のイベント:「カブトムシのお宿」では、カブトムシの幼虫を探し、持ったり手に乗せたり観察した後、食べ物の落ち葉を竹で組んだ「お宿」にしっかり詰め込む作業を行います。でも、子ども達にとっては、落ち葉をしっかり詰め込むために上に乗って跳ねる「落ち葉トランポリン」が一番楽しかったようです。